

## 2018年度私立大学図書館協会海外認定研修(B)報告書

西南学院大学 図書情報課  
坂本 里栄

### 1. 概要

日程：2018年6月23日～6月30日

場所：ニューオリンズ、ヒューストン

#### ●ALA年次大会

#### ●図書館視察

- ・ニューオリンズ公共図書館 ・ロヨラ大学図書館 ・テュレーン大学図書館
- ・ヒューストン大学図書館（含むNASAセンターアーカイブ）
- ・ローンスターカレッジ図書館 ・ライス大学図書館 ・ヒューストン公共図書館

### 2. 目的

日常の業務の中では経験できない以下の2点を目的として参加した。

- ・ALA年次大会への参加により、海外の図書館事情を知る。
- ・アメリカの様々な館種の図書館機能やサービスを知る。

合せて、次の2点も参加を後押しした大きな要因だった。

- ・私立大学図書館協会海外認定研修(B)により補助があったこと。
- ・キャリアプランとしての海外経験は、今後有利に働くだらうと考えたこと。

### 3. 報告

#### 3-1. ALA年次大会（ALA 2018 Annual Conference and Exhibition）

ALA(American Library Association, アメリカ図書館協会)の年次総会は、全米からだけでなく世界中から図書館関係者が集まる。年次大会の日程に合わせて、新しい製品のプレスリリースを行うベンダーもあるという。今年の年次大会は、2018年6月21日～26日の6日間、ルイジアナ州ニューオリンズで開催された。

ALAと言われて、皆さんはどのようなことが思い浮かぶだろうか。渡航前、私のALAについての知識は、年次大会があって、シカゴに本部があり、政治的な活動もしていて、年次大会では、政治家やハリウッドスターなどの有名人がスピーカーとして登壇したりするイベントがある、という程度だった。実際に行くことが決まると、年次大会の申込みの際に参加セッションを決める必要があり、どのセッションに参加するかを決めるため、情報を公式ウェブサイトを確認した。セッションだけでも1,000を超えており、分野と館種とキーワードで絞ったが、なかなか参加セッションが決まらなかった。

年次大会は海外の図書館員も歓迎してくれるが、セッションそのものは、アメリカ国内を意識したものが多く、日本の国内事情には合わないテーマや議論も多くあった。

セッションのタイプもさまざまで、参加者によるディスカッションが中心のセッションもあった。このようなタイプのセッションは、何の準備もなく参加してしまうと、参加者自身も辛いし、他の参加者に迷惑をかけることがある。意図せずペアワークがメインのセッションに参加してしまい、後悔していた参加者もいた。そういう意味では、興味のある分野を絞った後、ミーティングタイプを参考に、詳しいセッション内容までしっかり確認をした方がよい。

また、それぞれのセッションの時間は、1時間程度が多い。掘り下げるといっても、情報交換や議論の切掛け作りが目的のように感じた。

今回、私が選択したセッションは以下の通りである。

- (1) A Pedagogical Approach to Web Scale Discovery User Interface.
- (2) New Research in Collection Management and Development
- (3) How Metadata Enables or Inhibits Discovery and Access to Diverse Communities and Concepts.

ツアーで用意された通訳付きの特別セッションもあったが、あえて、現地のセッションを選択した。特別セッションに参加した人と、後ほど感想を話し合った印象では、それぞれ良い点はあったように感じたが、これから参加を検討される方には、1つは現地セッションに参加することをお勧めしたい。現場の生の声、アメリカ図書館界って研究色が強い印象があるなどといった現地ライブラリアンの雰囲気、母語でない環境で学ぶということ、このようなことは、現地セッションへの参加ならではの経験だったと思う。

つぎに、参加したそれぞれのセッションの所感を紹介する。

(1) 日本でも役に立ちそうな分野と内容である。自分の担当職務に活用できる。参加したところ、ディスカバリーと Google との比較による、語彙統制、シソーラス、サーチエンジン(技術的な事)の話題提供だった。本学図書館がディスカバリー導入中ということもあり、これまで気づけなかった視点でもあるので、役に立つ情報だった。

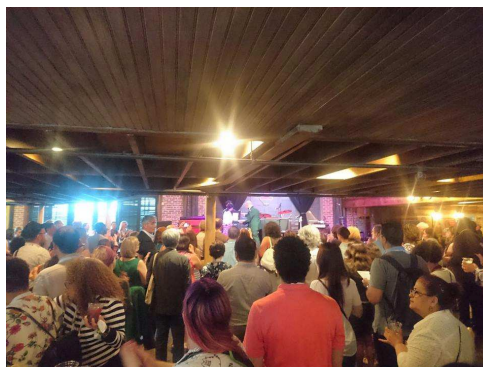
(2) 日本とは違う視点を得られることを期待して参加した。コレクション構築のための電子リソースの統計情報の複数の大学間での共有と分析の内容だった。考え方は、日本に近く、利用マニュアルをスキャンしてデータ提供を利用者にして利用率を上げよう、ライセンス管理は、スプレッドシート管理しているといった内容だった。

(3) 公式ウェブサイトの事前情報からすると、バリアフリーなメタデータとはなにか、という内容のセッションと読み取っていたが、実際に参加すると特定のシステムのユーザー会に近い内容だった。実際に実施される内容と、事前情報がかい離していることもあるようだ。他の参加者も途中退出が多く、私も期待していた内容とは異なったため、前半の情報提供のみで退出した。

年次大会全体の雰囲気は、日本で例えると、日本図書館協会の全国図書館大会よりは、図書館総合展の雰囲気に近い。図書館総合展と同じく、出展ブースは図書館関係企業や出

版社等が多い。数百のブースのほか、毎年 NASA のブースも出展されているとのこと。日本と同じようなフレンドリーな情報交換だけでも歓迎される場所もあれば、商談を前提としたブースもあり、商談前提のブースはアメリカ的だと感じた。

年次大会関連として、最終日の夜に行われる International Librarian reception にも参加した。2階建てのバーを貸し切って、ALA 年次大会に参加した世界中の図書館員が集まって親交を深めた。私が出会った人だけでも、ドイツの公共図書館員、大学図書館員、オーストラリアのバカロレア校の司書といった方々が挙げられる。国際色豊かな交流となった。



(International Librarian receptionの様子 2018年6月25日撮影)

最後に、今回の参加は、ツアーを企画した丸善雄松堂様経由で申し込みを行ったため参加費の値引きがあり安価に参加できたが、個人で申し込んでいればオフィシャルアプリを利用して、セッションの配付資料、パワーポイントの提供がされるなど、個人申込ならではのメリットもあったようだ。参加される方は、申し込み方法によって受けられるサービスと料金が異なるため、事前によく検討したほうが良い。

Ref: 大会スケジュールは以下を参照。

ALA annual conference & exhibition . full schedule. <https://www.eventscribe.com/2018/ALA-Annual/> (accessed 2018-8-18)

### 3-2. 図書館視察

図書館視察は、次の機関を訪問した。

- ・ニューオリンズ公共図書館 ・ロヨラ大学図書館 ・テュレーン大学図書館
- ・ヒューストン大学図書館 (含む NASA センターアーカイブ)
- ・ローンスターカレッジ図書館 ・ライス大学図書館 ・ヒューストン公共図書館

事前に視察先は決まっていたので、それぞれの視察先で日本との違いを意識した。本研修では複数の機関を訪問したが、本稿では特徴的だと感じた機関に絞って紹介する。

公共図書館は、ニューオリンズ公共図書館およびヒューストン公共図書館それぞれ本館と分館と、全部で4つの図書館を視察した。

視察で繰り返し聞いた言葉として印象的だったのは、**sustainability**(持続可能な)という言葉である。この言葉は、以下の文脈の中で繰り返し出てきた。

- ・地域気候に合わせた建物管理として長期間運用可能性
- ・資金、人、サービスといった運営持続可能性

アメリカの社会風土として、例えば資金的に厳しくなると事業が直ぐに中止となったりすることへの危機感による部分もあるのではないかと感じた。日本の図書館には無い視点、考え方を感じた。

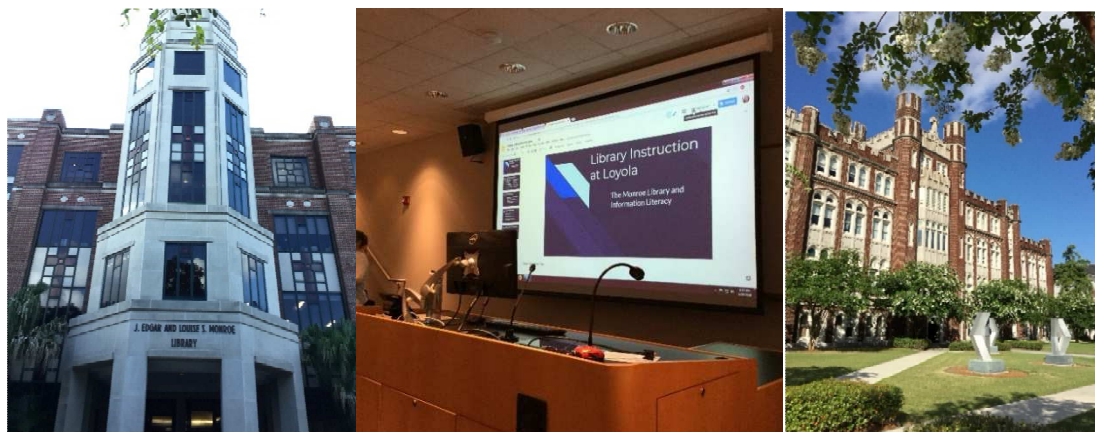
日本では、大学図書館では業務委託、公共図書館では指定管理やPFIといった運営形態が進んでいる。sustainability(持続可能な)という考え方は、日本でも取り入れていくべき視点と思う。

一方、大学図書館は、日本と同じく設置母体の状況によって様相はかなり異なる。

例えば、ローンスターカレッジは、公立の2年制大学で、出来るだけ安価で大学教育と職業訓練を提供している。ヒューストンエリアで最大規模の高等教育機関で、アメリカ国内でも急成長しているコミュニティカレッジの一つである。2017年には約9万人が入学している。卒業生の多くは、4年制大学へ編入している。図書館は公共図書館と大学図書館が複合したジョイントライブラリーで、大学内だけでなく地域住民へもサービスを提供している。大学としての専門的なサービス以前の問題として、地域住民も含めた、多様な年齢層、人種構成、言語に対応するサービスが求められている。例えば、教育系副学長が参加されていたので、大学が置かれている地域的な環境をどのようにとらえているかと質問したところ、人種はヒスパニックが多いが、白人、アフリカンアメリカン、インド系、アジア系と多種多様で、近隣で話されている言語は、90言語に及ぶ、アメリカらしい地域だという。ヒンディー語の読み聞かせグループのイベントがあったり、英語話者でない人たち向けの英会話サークルがあったりという事例が紹介された。

対照的だったのは、テュレーン大学である。1834年にルイジアナ医科大学として設立された歴史ある大学で、南北戦争で大学が閉鎖した後に、1884年にテュレーン教育基金によりテュレーン大学として再編された大学である。毎年、8,500人の学部生と5,000人の大学院生が入学している。安定した経営状況のもとに、大学が運営されている印象だった。図書館は、流行に流されることなく、約450万点の豊富な蔵書を基盤とした堅実なサービスを提供している。

最後にロヨラ大学は、1912年に設立されたカトリック系の私立大学である。約4,000人が入学している。設立年が近く、本学に近い構成の大学との印象だった。視察では、リテラシー教育を担当する図書館員と、図書館が実施している学部生向けのリテラシー教育プログラムの意見交換などを行った。内容は、日本での初年次教育に近く、先方の担当職員は、日本での実施内容に興味を持っていた。



(ロヨラ大学 2018年6月26日撮影)

#### 4. 最後に

与えられたスケジュールの中での活動ではあったが、アメリカの図書館事情や、ALAの活動といった現地事情を、日本の状況と比較しながら研修を進められた。結果的には、日本では得られることのできない経験をできたと思う。日常から離れて、外に出てゆく機会は貴重なものであるということを再確認できた。図書館職員として、また大学職員として、このような機会があったら積極的に参加することをお勧めしたい。

#### 5. 謝辞

このような機会を与えてくださった、私立大学図書館協会の皆さま、アイ・ダヴリュー・エイ・ツアー様、ALA・米国図書館研修事務局(図書館総合展運営委員会様、丸善雄松堂様)の皆さまと、研修に快く送り出してくれた本学図書館各位とに、この場を借りて心より感謝申し上げます。

以上